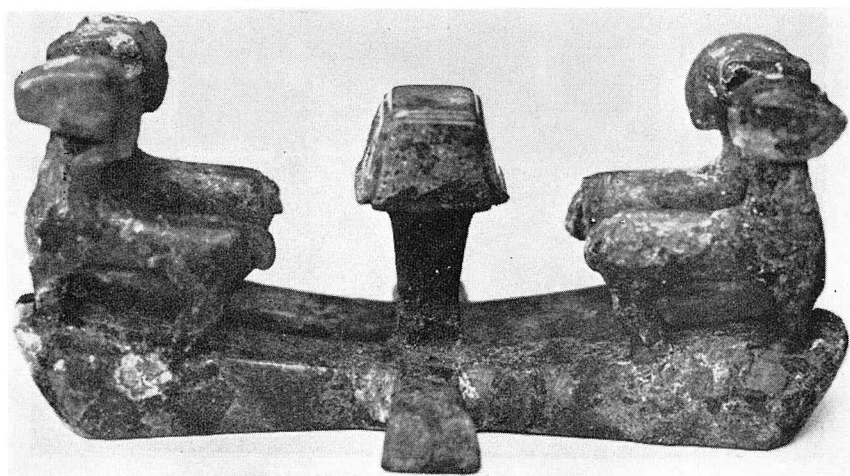
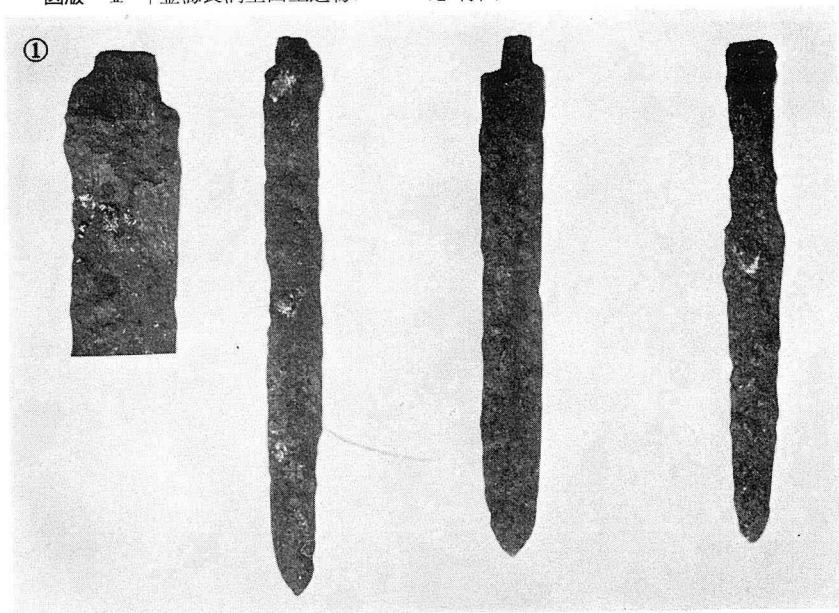




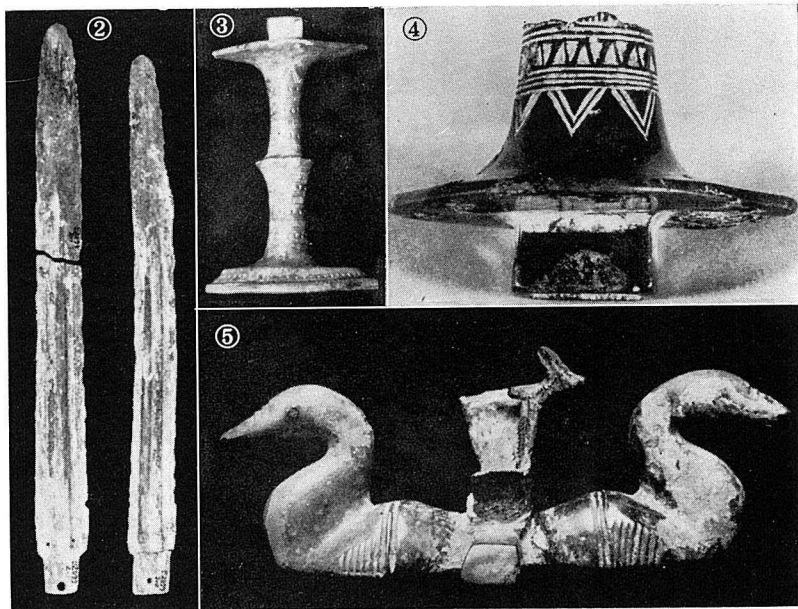
1 方格規矩四神鏡 (金海良洞里・岡内撮影)



2 銅製把頭飾 (金海良洞里・姜徳仁氏撮影)



1 鉄剣身・鉄矛（金海良洞里・岡内撮影）



2 銅剣身・把握部・把头飾（朝鮮南部各地出土）
（2・3 尹武炳氏撮影，4・5 樋口隆康氏撮影）

金海良洞里出土遺物について

岡内三真

はじめに

ここに紹介しようとする資料は、筆者が一九七一年八月に釜山市を訪れた際に、同地の朴敬源(Park Gyeong-won)氏、ならびに姜徳仁(Kang Deok-yim)氏の御好意により、調査することができたものである^①。

この一括遺物中には、鉄剣・鉄矛とともに、四個の馬形像をもった特異な剣の把頭飾があり、また、朝鮮南部では出土するのがきわめて稀である中国鏡をも含んでいる。

発見後に分散していた遺物をていねいに探索し、その組成を明らかにした朴氏は、『考古美術』一〇六・一〇七号(ソウル、一

九七〇年九月)に、「金海地方出土の青銅遺物」と題して、詳細な論考を発表された。これらの遺物を実見して、ますますその重要性を認識した筆者は、同氏の了解を得て、一九七一年九月に同論考を訳出し、後にそれを校閲して載いて一月末に訳稿ができた。ところが、その後、釜山大学の金廷鶴(Kim Jeong-hak)教授が、この遺物を日本語で資料紹介するということを聞き及んだので、筆者はその紹介をさし控えていた。一九七二年の夏に、金廷鶴編『韓国の考古学』(東京一九七二年八月)が出版され、早速これを通読したところ、本資料に関して発見の経緯や遺物の説明が充分でなく、一括遺物の組成が朴氏とは異なったものとなっている^②。金教授の報文がそのまま引用されると、遺構・遺

物の上でやや問題となる点が生じるように思われる。また、これらは朝鮮の初期金属器文化や社会を考察する上で、非常に重要な遺物であり、当時の朝鮮と中国、更には日本との関係からみても貴重な価値をもつ資料である。そこで、日本の研究者に、より正しく詳細に紹介する必要を痛感した。このような理由によって、遺構・遺物の実際について綿密に記述している朴氏の論考を忠実に伝えるために、ここにその全文訳を掲載する。次に、筆者自身の気付いた点を二、三補足し、更に、最近類例が増加しつつある細形短剣の把頭飾について、別に一節を設けて論ずることにしよう。

注① 朴敬源氏は、当時、慶南高等学校の校長をされていた。永く慶南南道地域の考古学調査に従事し、『震檀学報』『考古美術』などに、多数の論文や報告を発表されている。姜徳仁氏は、釜山市在住の美術品取藏家で、考古学にも造詣が深い方である。

② 『考古美術』は、韓国美術史学会の機関誌で、ソウルで一年に四回発行される。収録論文は、考古学・美学・仏教美術・建築などに関するものが多い。

③ 金廷鶴編『韓國の考古学』東京、一九七二、一三〇～一三二一ページ、図版一一一～一一三。朴氏が外した銅矛を、一括遺物中に加えている。

朴敬源 金海地方出土の青銅遺物

金海地方は、先史時代の遺跡が豊富でありながら、青銅遺物にかぎっては、その資料がきわめて稀な地域であるともいえる。

金海会峴里貝塚で発見された貨泉と、一九三三年に同貝塚の甕棺から発掘された細形銅劍三口・銅鈍二個・銅鏢一個・碧玉製管玉などの一括遺物と、数年前に、長有面茂溪里の支石墓で、精美な磨製石劍とともに出土した銅鏃数点^②、そして、酒村面出土と伝える銅矛一口以外には、これという資料がなかったのであるが、

ここに出土状況が比較的明らかな一括遺物が偶然に発見されて、新たな資料を加えるようになったことは、非常に幸いなことと思われるので、紹介することにした。

出土経緯

一九六九年九月頃、酒村面良洞里歌谷部落に住むチョン・モンギ (Jeong Mong-gi、当時、金海中学三年在学) と、隣の部落に住むキム・サンゴン (Kim Sang-gon) の二人が、チョン・モンギの家の裏山の土砂の中に、土器の一部が露出しているのを発見した。そこで、その周辺を採掘して、次のような遺物を発見した。

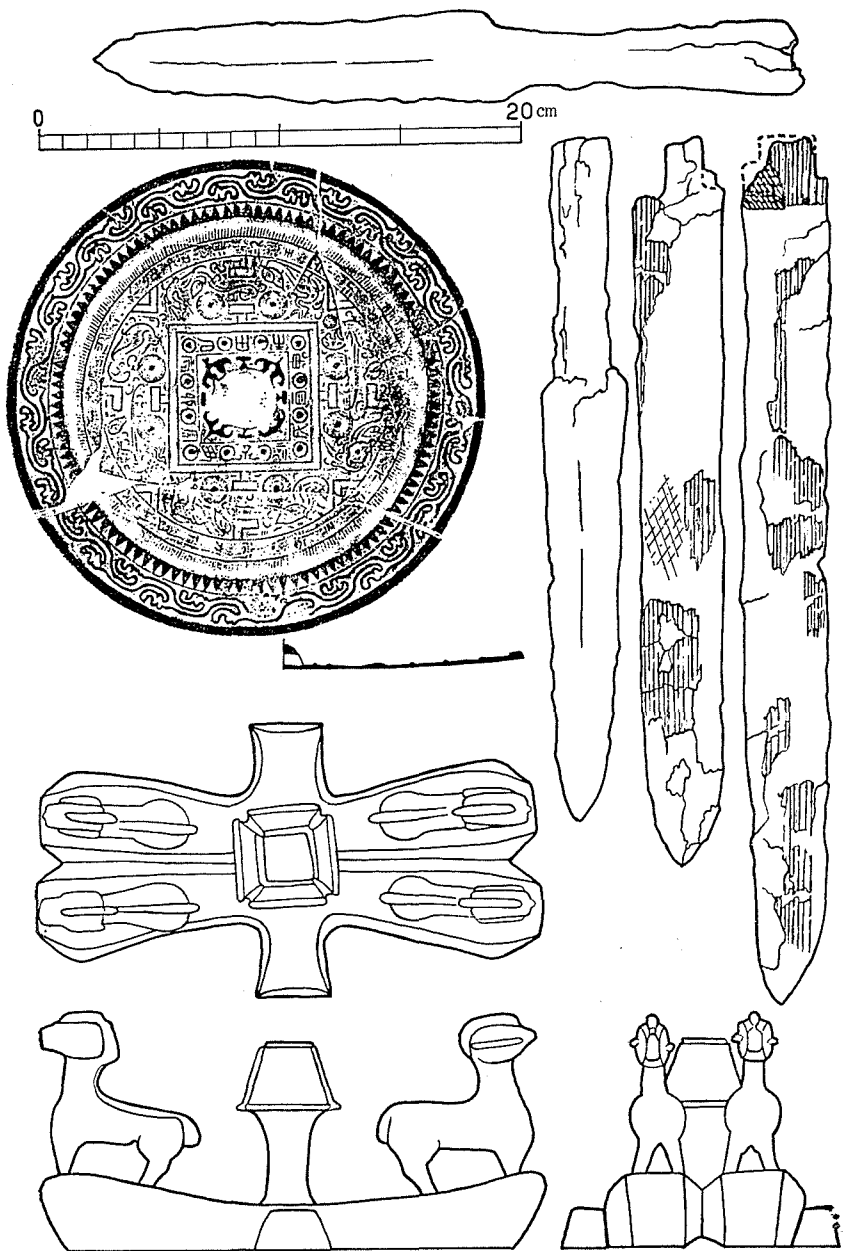


図1 金海良洞里出土遺物

(鉄剣・鉄矛は朴氏原図・把頭飾姜氏原図・岡内製図 鏡は朴氏手拓，把頭飾の縮尺は1/2)

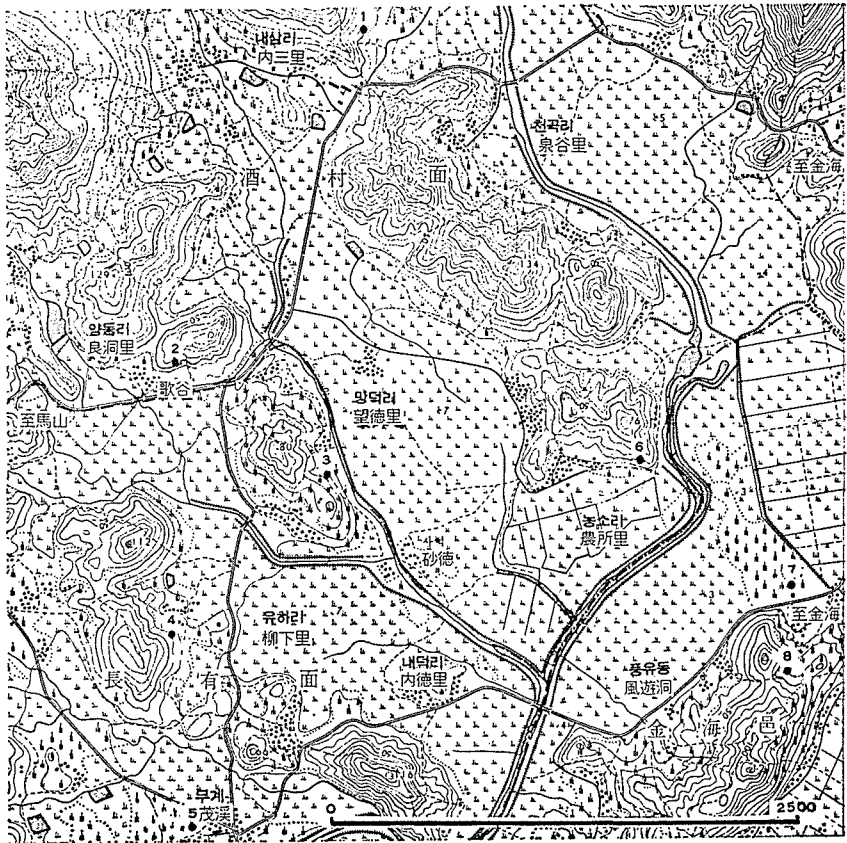


図2 金海地方主要遺跡（朴敬源氏原図，岡内製図）

- | | | | |
|--------------|----------|------------|----------|
| 1. 酒村面内三里古墳群 | 2. 良洞里遺跡 | 3. 良洞里歌谷貝塚 | 4. 柳下里貝塚 |
| 5. 茂溪里支石墓 | 6. 農所里貝塚 | 7. 七山支石墓 | 8. 七山貝塚 |

ここは、金海邑から西へ約一〇km、進礼面を経て進永に通じる道路と、長有面に行く道との分岐点に近いところである。ここから長有面柳下里貝塚へは約二km、茂溪里まで

発見者たちの話を総合すると、土器は、約二mの距離においてその両端と中間地点で、各々一個ずつあらわれ、鉄剣などの四点は右端の土器の下から出土した。銅鏡は、鉄剣の周辺で鏡面を上にして、破片が円形に散布していたとい、剣把頭飾も鉄器付近の土中から採集したという。

銅製剣把頭飾一個、
方格規矩四神鏡一面、
鉄剣二口、鉄矛二口、
土器三個、

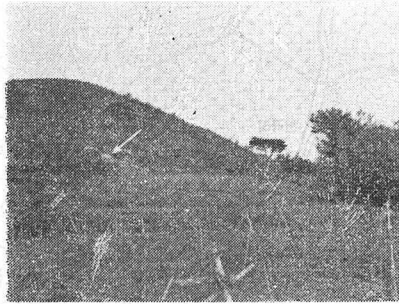
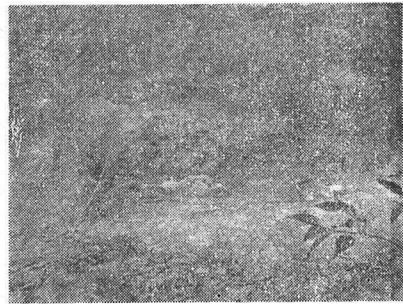


図3 遺跡全景
手前は葡萄園、山腹の松の下が発見場所。



遺構
遺物を採取したままの土壌。(双方とも朴氏撮影)

m前後の丘陵となり、広い平野の中で、あたかも海上の島のような景観を呈している。このような丘陵の東南の斜面は、大概、農家が集まって、村落を形成し、その周囲には、例外なく、貝塚や支石墓のような遺跡が残って

は約4kmの距離である。

この地域は、金海平野の西端に位置し、西北に三〇〇〜五〇〇mの分水嶺を背にし、そこから三つの山脈が東

南の金海平野のほうに手の指のように突き出ている。高い所は八〇

いるのが、この地域の特色である。

道路をはさんで一〇戸ほどになる歌谷部落の裏山の標高二〇〜三〇mの緩い傾斜地にも、小規模な土墳墓が散在し、部落の前の丘陵の東南斜面にも大きな貝塚があることが、今回、新たに確認された^④。七〜八年前にも、大水の後で土壌の一部が露出して、一時、盗掘者たちが押しかけたというが、今もこの部落の裏山には、破損した土器片が無数に散らばっている。

現場は、発見者である二人の案内で筆者が調査した一九六九年一二月頃まで、ほとんど変動がなかった。ここは、一九六九年夏の集中豪雨で斜面が崩れ、土器の一部が露出し、このことが、遺物を発見する契機となったのであるが、これらの遺物を採掘するために攪乱したままの状態が残っていた。現在では、その原状を調べることができなくなっているが、そこが土壌の埋葬址で、これらの遺物もその墓の副葬品であったことにまちがいないものと思われる。これらの遺物中、銅鏡はすでに二〇余片に破損していたが、幸い、完全に収拾され、剣把頭飾とともに何人かの手を経て、釜山の某收藏家の手に入っている。鉄製品四点は、発見者たちが保管している。土器三点中で比較的原形を保っている一点は、ジョン・モンギが自分の家に置いていたというが、いつの間にかなくなっていたので、筆者は見ることができなかった。二人

の話を総合すると、頸部が細くくびれた丸底の壺形土器であったという。

青銅製劍把頭飾

十字形の中央部に裝飾鈕が突出した形式であるが、特異なのは、十字形の長軸部が複式となっており、その先端に四頭の馬形彫像がついた珍しい形態に構成されていることである。

長軸の長さ 一〇五mm 短軸の長さ 五七mm
 鈕の高さ 四三mm 馬の高さ 五〇mm

全体を一度に鑄成したものであるが、現在、表面が軟綠色に錆化しており、まるで玉のような光沢が美しい。四頭の馬は、素朴であるが、形態の要所をよく把握した表現である。

劍把頭飾には、石製・銅製・被銅石製の三種類があり、それが磨製石劍・銅劍または鉄劍の把頭に装着するものとして、特に、満州、韓半島でその分布が明白な遺物であることは、すでに学界で広く知られた事実である。⑤現在まで、国内で発見されたもののみでも、五〇例を越すと推測される。その中には、石製劍把頭飾の鈕状突出部の斜面に、素朴な馬の形が陰刻された一例があるのみで、これと同じ精巧な例は、前に見られなかった。劍把頭飾も、この程度になると、発達の極限に到達した感がなくもない。⑥国内出土の多くの遺物中でも、その出土地が明白で、またそれが使用

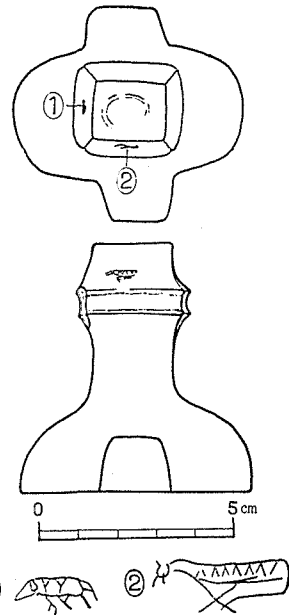


図4 慶州南山発見把頭飾
 (『人誌』45-8による。)

された時期について関係のある遺物と伴出したものは、別表(7ページ)に挙げた数例にすぎない。(訳者注)

このように一覽表を作ってみると、劍把頭飾の発達過程とその年代に対して、おおよそ、一つの限界を定めることができそうである。このような意味からも、注目し得る遺物であることはまちがいない。

銅鏡

銅鏡は、直径二〇cm、鏡面の反転度は鏡端で四・五mmに達する大形である。二〇余片に破損していたが、接合すると、ほとんど完形を知ることができた。現在は欠失している小片も、出土してから数人の手を経るうちに紛失したものである。鏡背には、一部酸化したところと、緑青と鉄錆のまだらが数箇所あるが、出土品

| 番号 | 出土地 | 材料 | 形式 | 伴出遺物 |
|----|---------------|----|---------|--------------------------------|
| 1 | 釜山市東萊区長箭洞 | 石 | 枕形 | 磨製石劍 |
| 2 | 慶北大邱市東区晚村洞 | 銅 | 十字形 | 銅劍・銅劍付屬具・銅戈など |
| 3 | 黄北黄州郡黒橋里 | 銅 | 十字形 | 銅劍・銅矛・五銖錢など |
| 4 | ピョンヤン市楽浪区域貞柏洞 | 銅 | 十字形 | 銅戈・方格四乳葉文鏡など |
| 5 | 慶北大邱市西区飛山洞 | 銅 | 十字形 | 銅劍・銅劍付屬具・銅矛・銅戈・蓋 弓帽・帶鉤・鉄器など |
| 6 | 慶北大邱市西区飛山洞 | 銅 | 双鴨形 | |
| 7 | ピョンヤン市寺洞区域美林里 | 銅 | 十字形に方形鈕 | 銅劍・内行花文鏡など |
| 8 | 慶南金海郡酒村面良洞里 | 銅 | 十字形に方形鈕 | 鉄劍・鉄矛・方格規矩四神鏡 |
| 9 | 全南靈岩郡始終面新燕里 | 銅 | 十字形に方形鈕 | 銅矛 |
| 10 | 全南谷城郡木寺洞面拱北里 | 土 | 十字形に方形鈕 | 無文土器片 (支石墓の積石部から出土) |

特有の鉛黒色の光沢が美しい鏡である。

鏡背内区には、四葉文鈕座を中心とする方格内に、一二の円乳と十二支の文字を鑄出し、内区には方格から四出するT字形に対してL字形を、また方格の四隅に対してはV字形を配置している。L・V字形のあいだごとに八個の内行八花文乳座と一二の禽獸文を、隙間なく細線で鑄出している。これらの図像は、方格内の十二支の子午線を基準として、青龍・白虎・朱雀・玄武の神獸を、東西南北の順に配置している。このほかに残った三足鳥

・蟾蜍のようないくつかの図像が、どんな意味から、どのような順序で表現されたものかは、よくわからない。外区は、櫛齒文帯・鋸齒文帯をめぐらし、次に、厚さ四・五mmの外縁部には、唐草文様化した流雲文が洗練された曲線を示している。銘帯は内区と外区の間であり、整美な漢隸の銘文が二八字ある。一部酸化し、また、このような銘文によく見られる省画があるが、大略、次のように判読することができる。

尚方佳竟眞大□ 上有仙人不知老
渴次玉泉飢食聚 浮由天下傲四海

銘文中、「眞大□」は「眞大好」または「眞大巧」のどちらでも差支えないので、銘文はほとんど完全といえるであろう。銘文中の初句、「尚方佳竟眞大好」は、この銅鏡が漢代の尚方官工の製品であることを示している。「上有仙人……」以下は、長寿無量であるという仙人たちが、のどがかわけば玉泉を飲み、飢えれば麋を食べ、天下に浮由し、四海を傲遊するという仙人生活を描写している。この銘文のある鏡を佩用する者は、やはりまた、万寿長命であるという意味に解釈される。

このような銅鏡は、いわゆる「方格規矩四神鏡」で、王莽の新を中心として、前漢末から後漢まで盛行した鏡式の一つとして知られている。わが国で出土した同じ様式古鏡のみでも一〇余面

になるものと思われるが、その中でも、本鏡とよく似たものとしては、次の二面がある。

富田晋二旧蔵 方格規矩四神鏡 直径二一・八 cm

ピョニヤン付近出土 新尚方作方格規矩四神鏡 直径二二 cm

後者には「新有善同出丹陽……」の銘文があり、これが王莽の「新」の時代のものであることを知ることができる製品である。^⑦

これら二面の鏡と比較すれば、鏡の形態や鏡背の文様などがほとんど同一で、本鏡もやはり、同じ時期の尚方の製品であることを否認することができないのである。ただ、前記した二面の鏡の鏡背文様が、ともに、本鏡よりは形式化した面がみられるので、本鏡が前記の「新尚方鏡」より年代が古いように思われる。大体、紀元一世紀頃の製品と推定すれば、大きな誤まりはないものと考えられる。

鉄劍・鉄矛

鉄劍と鉄矛各二口は、土壙の東端の土器の下に並んで置かれていたという。鉄劍二口は、図のとおり、長さが異なるだけで、まったく同じ形態に作っている。

鉄劍(イ) 長さ 三六・五 cm 幅 三・五 cm

鉄劍(ロ) 長さ 三〇・五 cm 幅 三・五 cm

鋒の断面は扁平な菱形であるが、鑄ははっきりせず、丸味を帯

びている。劍鞘は木で作っていたようで、劍(イ)には、鋒の両面と茎に木目が明らかに残っている。茎の右半分には、劍把をくくった細い糸の痕跡がそのまま残っていて、劍把に装着した状態を推察し得る。鉄劍(ロ)にも、一部に劍鞘の木質痕跡がみえ、また、その鋒の中央には、何か織物のようなものが一部残っている。

鉄矛(イ) 長さ 二九・五 cm 幅 三・五 cm

鉄矛(ロ) 長さ 二八・八 cm 幅 三・〇 cm

鉄矛(イ)・(ロ)ともに、その鋒の形態は鉄劍と異なる点がない。柄をさしこむ莖部は、鉄を巻いて円筒形に作っており、接合部が重ならず、しかも、隙間のないように製作されていて、比較的すぐれた鍛造手法をみせている。この鉄矛は、図面で見ると、その輪郭のみでは銅矛と区別できないほど、その外形が似ている点が眼につく。

土器

この土壙に副葬された土器は、およそ三個あったようであるが、二個は、最初から原形を知り得ないほどに破損していた。他の一個はほぼ完全で、発見者であるチョン・モンギが、自分の家に置いていたが、いつの間にかなくなってしまったということは前述したとおりである。その土器は、頸部が細く、底面がまるい壺形で、高さは二〇 cm程度であったという。

筆者が、遺跡の近くに多量に散布していた次の四種類の土器片中で、

①軟質赤褐色無文土器 ②軟質青灰色土器（捺打文）

③赤褐色磨研土器（きわめて少数） ④新羅土器

その壺形土器のようなものはどれかと質問したのに対し、発見者二人は、ためらうことなく、②の土器片を指摘した。写真の土器は、七、八年前にこの部落の前を通り過ぎた際、その農家で便器として使用していたものである。その出所を聞くと、裏山で出たというので写真を撮っておいたもので、高さは七〇cmほどの青

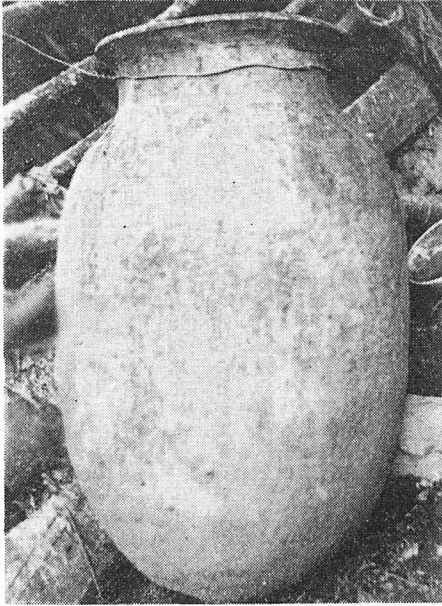


図5 青灰色無文土器（朴氏撮影）

灰色無文土器であったと記憶している。この部落の裏山で採集された土器片中にも、同じ質の大形土器片がまじっていることからみて、あるいは、この一帯の埋葬址は、土壙墓以外に甕棺墓もまじっていたのではないかという考えから、ここに付記して、後日の調査を待つことにしたい。

以上の遺物は、前述のとおり、洪水による偶然な発見であるとはいえ、その出土地点が確実で、また、幸いにもその現場がそのまま保存されていた。原状を明確に把握できないまでも、大体、同一の土壙墓に副葬されていた一括遺物であることを、確認することができた。ここで出土した銅鏡は、それ自体には紀年銘がないが、西紀一世紀頃に盛行した方格規矩四神鏡で、その中でも標式になり得る製品であることは、前述のとおりである。これと同じ様式の銅鏡は、わが国では、楽浪の故地以外の地域で発見されたことを、今まで聞くことができなかった。そしてまた、それが精美な青銅製品や鉄製武器・土器などとともに、土壙墓から出土した点は、更に一層重要な意義をもつと思われる。この一括遺物が、将来、わが国の古代墓制の問題や、大陸文物の交流関係、またはこの地方の初期金属文化の様相を究明するのにも、重要な資料となることを期待する。

この一括遺物は、出土後に分散し、何人かの手を経て転々とする

る過程で、不確実な銅矛二口が、ここに便乗付加されるという混線状態をかもした。筆者は、遺物の行方を追求すると同時に、出土現場を数回調査して、その銅矛がこの一括遺物と関係のないもので、中間の商人たちが任意に付加したものであることを確認するに到った。このようなことのために、意外に時間と努力を費やすことになったが、今、かろうじてこの一括遺物を完全に復原できるようなったことを、おのずから喜ぶものである。

注① 藤田亮策・梅原末治『朝鮮古文化綜鑑』以下、『綜鑑』と略称
第一巻、奈良、一九四七、八七～八九ページ、図版二七・四九・五〇。

② 国立博物館『青銅遺物図録』ソウル、一九六八、一四～一五ページ、図版二三、図面一九。

③ 藤田亮策・梅原末治・小泉頭夫『南朝鮮に於ける漢代の遺跡』ソウル、一九二五、九一～九二ページ、図版四五。

④ 酒村面後浦里砂徳部落、東西に五〇〇メートルの距離にある二つの丘陵には、農所里貝塚と柳下里貝塚とがある。

⑤ 藤田・梅原『綜鑑』第一巻、七五～七六ページ、図版四一。

秋山進午「中国東北地方の初期金属文化の様相(上)」『考古学雑誌』(以下、『考誌』と略称) 五三巻四号、東京、一九六八、二〇～二二ページ。

⑥ 藤田・梅原『綜鑑』第一巻、七六～八〇ページ、図版四一。

⑦ 関野貞、ほか『栗浪郡時代の遺蹟』本文、ソウル、一九二七、三

一八～三二ページ。

梅原末治『鏡鏡の研究』東京、一九二五、一五七～一五八ページ、第一図。

藤田・梅原『綜鑑』第三巻、八ページ、図版五六。

(訳者注)

把頭飾の出土例中、No.二・五・六・九・一〇の五例は、朴敬源氏が校閲の際に補った例である。図4の遺物は、現在慶州博物館に展示している。

遺物の観察

発見者の協力と朴氏の努力によって知り得た事実、上述したとおりである。最近、筆者が、この遺構と遺物に関する新事実や変更はないかと改めて書簡で問い合わせた際にも、それ以外の発見や追加すべき事柄はないということである。したがって、遺構については、上に述べている以上には、詳細を知り得ない。遺物については、筆者自身の観察で気がついた点が二、三あるので参考までに付記しておく。

二口の鉄剣身は、ともに全面が錆化し、一部はさびぶくれしている。朴氏は短い鉄剣身には、織物の痕跡らしいのがみえると言っているが、筆者が見た時には、すでに識別不可能になっていた。しかし、二口の剣身には、双方とも表裏両面に鞘の木質が錆

着して遺存している。また、長いほうの鉄剣の関から茎にかけて、糸を撚り合わせて作った紐をまきつけていたあとがあざやかに残っている。茎は短かくてやや薄く、断面は長方形である。剣身・茎ともに木質が遺存しているから、鞘も把も木製であったようである。関と茎に遺存している紐のあとは、把と剣身を固定させるためか、あるいは鐔を付ける装置であろう。ここで伴出した把頭飾が、これらの鉄剣のいずれかに着装されていたという確かな証拠は何もない。むしろ、把頭飾にはまったく鉄錆が付着していないことなどから、着装されていなかった可能性が大きいといえる。このように、茎が短かく、剣身の断面が扁菱形になる特異な鉄製の短剣は、朝鮮と日本の北九州とで発見例が多い型式である。

鉄矛は、鋒部も袋部もともに短かく、身がやや厚い作りである。袋部は中空であるが、錆化していて木質の痕跡などもみえず、元来、柄をつけていたか否かを知る方法がない。こうした短い鉄矛は、朝鮮南部の出土例は少なく、朝鮮北部の土墳墓から多く出土している。しかし、楽浪の漢式木槨墳や磚室墓などから出土する長鋒型式とは、形態的に大きな相違がある。これらの鉄剣と鉄矛は、細形短剣の分布圏内での特異な利器であるが、比較的遅れて出現する型式である。

ここで出土した銅鏡は、流雲文縁方格規矩四神鏡である。鏡背面には、ところどころに鉄錆が付着していて、上記の鉄製利器と伴出したという発見者の話を裏付けている。銅質と遺存状態が良好であるためか、小片に破砕している割には欠失した部分が少ない。取捨と復原によって、ほとんど完全なまでに鏡の全容を知ることができ、中国鏡の出土例の稀な朝鮮南部に、この上ない好資料を提供する結果になっている。出土時には、すでに一部分が破損していたというが、発見後に生じた新しい破断面もみられるので、埋めた当時は、破損のない完全な鏡であった可能性がある。

この方格規矩四神鏡は、蒼龍と白虎が日月の象徴をささげもち、十二支の文字と「尚方」ではじまる銘文があり、外縁には時計まわりの流雲文をもつという特徴がある。特異な点はあるが尚方官工で製作したことの明らかな中国鏡である。これをどのような経緯でもたらし、ここに埋めたのかはよく知り得ないが、恐らく、楽浪郡を経て手にいれたのであろう。^①

次に、特異な形態の把頭飾は、この一括遺物の中でもとりわけ注意をひく資料である。筆者が計測した際には、錆化による部分的な剝離や欠損はあるが、全体に遺存状態は良好であった。前述したように、鉄錆はまったく付着しておらず、全体が青緑色の錆でおおわれ、部分的に黄色がかったところがある。四個の馬形像

の背・腹・頭は黄緑色を呈し、なめらかで光沢がある。この馬形像は、十字形の把頭飾の長軸と平行ではなく、中心から四方に向って、やや放射状に配置している。方柱状の突起も本体の十字形と対称ではなく、少しねじれていて、位置もやや一方にずれている。また方柱状突起の基部の裏側、すなわち、内面の中央部が隆起している。このような現象は、鑄造の際に生じたものである。

筆者はその鑄造技法について、次のように推測している。まず、馬形像と方柱状突起を別々の鑄型で鑄造し、その後、これを一つの鑄型にそれぞれ固定する。そこに湯を注入して十字形の枕状部と張り出し部を鑄造すると同時に、馬形像と方柱状突起をも鑄接したと考えている。^②

方柱状突起上部の笠形には、四隅に切込みがあるが、中空ではない。また馬形像は重量からみて中空と思われるが、確実ではない。把頭飾の両端に四個の動物像をつけ、それが明らかにウマを表現しているのは、特に興味をそそられる点である。馬の形態そのものは、さほどリアルではないが、永川漁隱洞の馬形飾と似て、立体的な表現であり、四つの脚がある。

注① 今回は紙幅の都合上、方格規矩四神鏡については詳述することができない。栗浪郡治のあったビョンヤン市付近の古墳からは、解放

後、数面の中国鏡が出土している。後日、朝鮮で発見された鏡について論じる際に、本鏡についても詳しく述べる予定である。

② X線撮影や科学的な分析を行うことによって、銅器の鑄造法を知ることができる。今後、こうした方法が銅剣や銅鐔、あるいは銅鏡などに応用されれば、製作技術の不確実な点を、かなりの程度まで明らかにし得るであろう。

cf. R. J. Gettens, "Radiography," in *The Freer Chinese Bronzes*, Vol. II, Washington, 1969, pp. 159~170.

Smith, C. S., "The Techniques of the Luristan Smith," in *Science and Archaeology*, R. H. Brill, Ed., Maastricht and London, 1971, pp. 32~54.

型式分類と地域性

本節では、細形短剣^①に伴う把頭飾の型式分類を行い、その系統と地域性を明らかにしてみよう。

良洞里例のような、動物を形どった把頭飾は、日本や韓国で、近年、数例が知られるようになってきている。このような形態の把頭飾は、細形短剣を出土する地域の把頭飾の中で、どのような位置にあるかを検討する。

細形短剣分布地域の把頭飾には、石製・隕石製・被銅石製・銅製・土製の遺存例がある。土製の把頭飾は、朝鮮南部で、解放後

に二例が出土しているが、それらがどのような剣身に伴ったのかわらかではない。鬪争に用いる実用的な武器の把頭飾として使用したとは考え難く、むしろ、銅製品を模倣した非実用品であって、呪術か祭祀に用いた可能性がある。

さて、把頭飾は、従来、銅剣・鉄剣・磨製石剣の把頭飾として使用すると考えられてきた。しかし、銅剣・鉄剣に着装していた例はあるが、磨製石剣に着装したままで出土したという確かな例は、まだないようである。磨製石剣の把頭飾としては、有柄式石剣に扁平な円板状の飾りを付加した一例が、知られていただけ

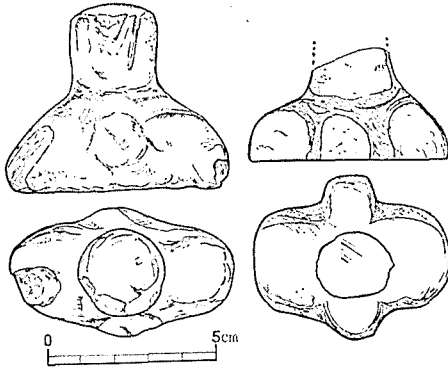
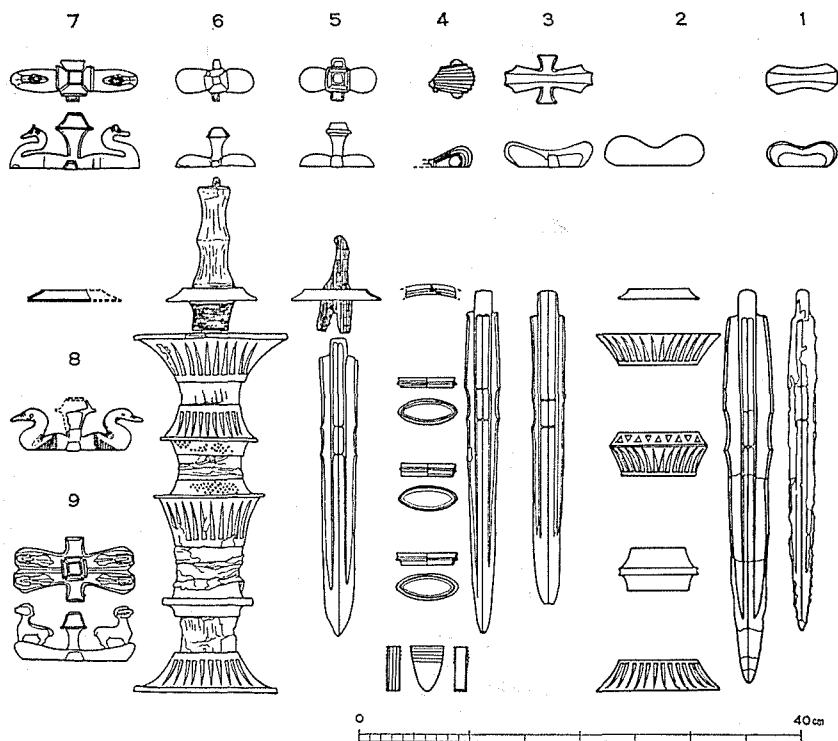


図6 土製把頭飾

左 全南拱北里 (『韓国支石墓研究』による)
 右 大邱山格洞 (『古文化』5・6合輯による)
 (右は縮尺不明)

ある。近年、金海付近で、これに類似した例が出土しているが、磨製石剣に伴う確実な把頭飾としては、わずかに、この二例があるにすぎない^⑤。金属製の剣を持ってないから石で剣身を作ったとすると、把頭飾に銅を使用したというのは少し考え難いことである。銅剣・鉄剣の剣把は中央の膨んだ長鼓胴形であるが、有柄磨製石剣の剣把は逆に中央が窪んだ形態である。更にまた磨製石剣と分離式の把頭飾とは、未だ伴出した例がない。金属製の剣と石剣とは、把頭飾に相違があるのではなからうか。銅剣・鉄剣に使用した把頭飾を磨製石剣にも用いた、とする従来の見解には再検討の余地がある。

把頭飾の分類は、まず榎本亀次郎氏の四分類に始まり、藤田亮策・梅原末治氏による三類一〇式、秋山進牛氏の四分類^⑧がある。これららばみな、遼寧から北九州に至る広範な地域の把頭飾りを、一律に分類している。そのため、細形短剣に伴う把頭飾の分類としては、各々、少しずつ不要な個所がある。秋山氏の例でいえば、Ⅰ式剣把頭は朝鮮では発見されず遼寧地方でのみ発見されるのに、Ⅲ式剣把頭は遼寧での出土はわずかに二例だけであり、朝鮮での出土例が最も多く、日本の対馬での出土例が四例である。逆に、Ⅳ式剣把頭は朝鮮でのみ発見され、いまだ遼寧と日本とでの発見例はないという具合である。そこで、細形短剣に伴う把頭飾のみ



を遼寧式やオールドス式短剣の把頭飾とは別個に分類する必要がある。

細形短剣把頭飾の型式分類

A I 型式 (図 7 の 1・2)

中央が窪み、両端が丸く膨らんだ枕のような形をしたもので、石製品に限る。

A II 型式 (図 7 の 3・4)

枕形の中央部に方台形の張り出しをつけ、平面形でみると十字形をなすもので、石製品と銅製品がある。

A III 型式 (図 7 の 5・6)

十字形の中央部に方柱状の突起を垂直につけたもので、石製品・銅製品・土製品がある。

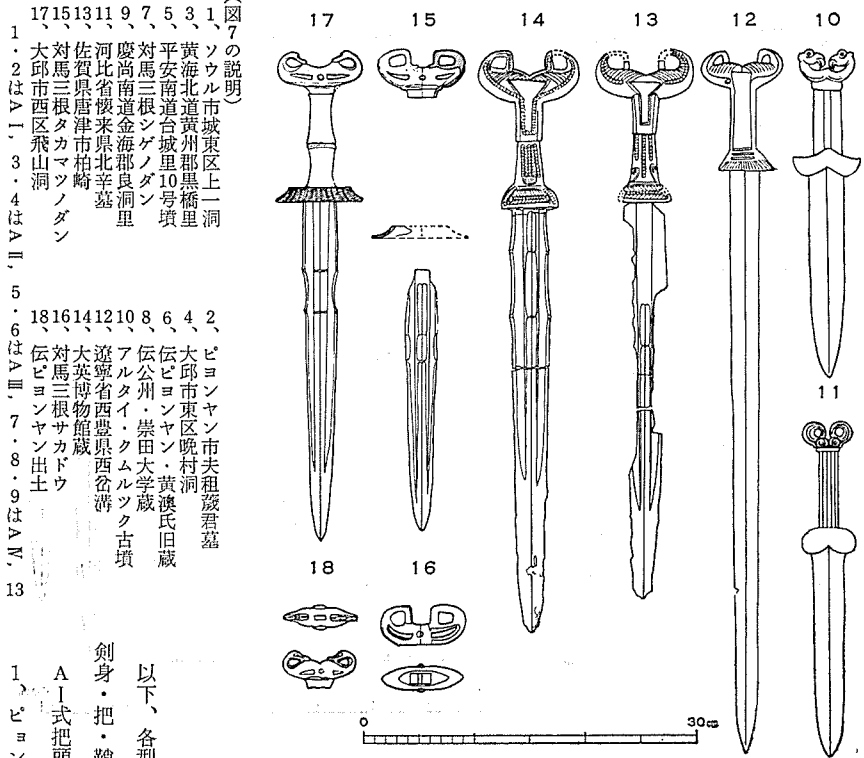
A IV 型式 (図 7 の 7・8・9)

十字形で、方柱状突起をもち、更に、枕形の両端、あるいは上部に動物像をつけた銅製品である。他に、上記の四型式とは系統をやや異にする、二型式の把頭飾がある。

B I 型式 (図 7 の 13・14)

従来、触角式と呼称していた把頭飾の中で、把

図7 把頭飾・短剣集成図



- (図7の説明)
- 1、ソウル市城東区上一洞
 - 2、ピョンヤン市夫租蔭君墓
 - 3、黄海北道黄州郡黒橋里
 - 4、大邱市東区院村洞
 - 5、平安南道台城里10号墳
 - 6、伝ピョンヤン・黄漢氏旧蔵
 - 7、对馬三根シゲノダン
 - 8、伝公州・崇田大学蔵
 - 9、慶尚南道金海郡良洞里
 - 10、アルタイ・クムルツク古墳
 - 11、河比省懷来県北辛墓
 - 12、遼寧省西豊県西谷溝
 - 13、佐賀県唐津市柏崎
 - 14、对馬三根タカマツノダン
 - 15、大英博物館蔵
 - 16、对馬三根サカドウ
 - 17、大邱市西区飛山洞
 - 18、伝ピョンヤン出土

・14はBⅠ・15・16・17・18はBⅡ、Aは遼寧系でBはオルドス系の把頭飾である。10・11・12は細形短剣の分布しない地域で出土したB式の祖型または先行型式である。

頭飾から鐔までを同鑄にした銅製品である。

BⅡ型式(図7の15・16・17・18)

把頭飾と把握部の別れた分離式で、銅のみで作っている。背中合せて互いに振り返って向き合った二羽の鳥を、写実的に表現したものと、それが美化したものとがある。

以上の六型式に分類することが可能である。把頭飾は、遊離遺物として単独に出土した場合が多いために、どのような剣身・把・鞘を伴ったかが不明な例が多い。その上、発見地の所伝にも不確実なものが多く、遺物の多い割合には、分布や出土数の資料として使用できる例は、ごく限られているのが実状である。

以下、各型式の把頭飾について、セットとして捉え得るような剣身・把・鞘などを伴出した例を中心にみてゆこう。

AⅠ式把頭飾伴出例

- 1、ピョンヤン市楽浪区域貞柏洞夫租蔭君墓(図7の2)

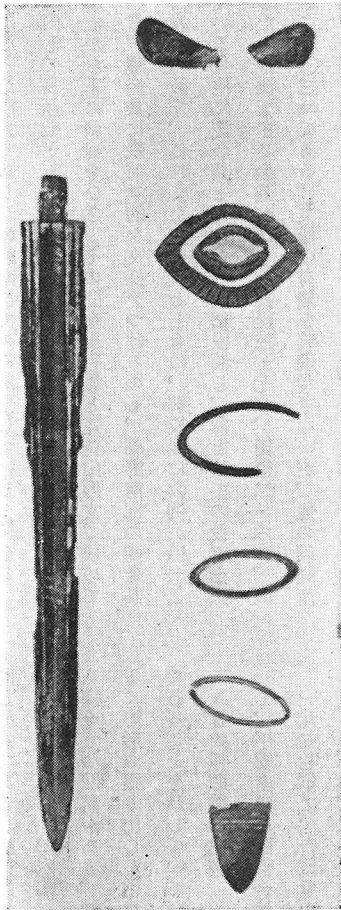


図8 大邱飛山洞発見の銅剣身・装具
(『湖巖美術展』による)

ある。把握部が遺存して
ないだけで、他の付属金具
は残っており、AⅡ式把頭
飾を伴う剣制の原形を推測
することができる。鞘金具
は、三個の楕円形銅環と、
一個の鞘尻金具とが遺存し
ている。このような鞘金具
は、解放後に類例を知るよ

銅剣身・鐔金具・鞘金具を伴っており、朝鮮北部の剣制をみる

のに好個の例といえよう。他に銅矛・鉄製長剣身・鉄刀など、多
くの遺物が出土している。鞘金具は、三角形で透しのある金具三
個と、無文で中央に突起帯をめぐらした金具一個があり、鐔金具
は、断面杏仁形で、側面は台形である。これらの金具を着装した
実例としては、黄澳氏旧藏品がある。把頭飾は、青緑色のすじが
はした堅い石で作っていて、典型的なⅠ式把頭飾である。

2、ソウル市城東区上一洞(図7の1)

細形銅剣身を伴っている。工事中に出土したが、他の伴出遺物
や明確な遺構は発見できなかったという。把頭飾は黒灰色をした
赤磁鉄鉱石製で、稜があり、断面六角形を呈する。

AⅡ式把頭飾伴出例

1、ピョンヤン市楽浪区域石岩里^①

一九六二年に発見し、腐った板の痕跡がある土壌内から、多く
の遺物が出土した。細形銅剣身・把握部・把頭飾は着装したまま
の状態出土したが、鐔と鞘金具は遺存していなかったという。

把握部は、表面に穀粒文を施し、中央部の膨らんだ長鼓胴形であ
る。図はないが、朝鮮北部に普通にみる型式で、近年、貞柏洞で
も銅剣身に伴出している。把頭飾は、縦六・五cmで、枕形の上面
には文様がない。

2、慶尚北道大邱市西区飛山洞No.1(図8)

一九五六年に発見した一括遺物中の、セットをなす細形銅剣で

うになった型式であり、朝鮮南部でのみ出土している。鐔金具は、楕円形で長径七・五五cm、短径五・〇五cmをはかり、外部側面には上から下に斜線をひき、その間を平行線と連続山形文で填めている。鐔金具に幾何学的な文様をつけるのも、朝鮮南部の鐔金具にみる特徴で、これもまた鞘金具とともに、解放後に数例が出土している。他に鐔金具と剣身との間に嵌装し、鈕としての役割を果したと推測できる金具があり、長径三・七cm、短径二・六cm、高さ二・〇三cmである。文様の有無を判別できないが、他の朝鮮南部出土例がすべて文様を施しているので、恐らく本例も幾何学文を配しているであろう。把頭飾は中央部が欠失しているが、方形張り出しのあるAⅡ式と推測できる。枕形の左右側面に小突起を設けているのは、大邱晩村洞例と類似している。

3、慶尙北道大邱市東区晩村洞^⑭(図7の4)

一九六六年に、中広銅戈などとともに出土した一括遺物である。細形銅劍身三口・鞘金具四個・鐔金具一個が把頭飾一個と伴出している。ところが、劍身には二型式があり、把頭飾と鞘金具などを、どの型式の劍身に組み合わせていたかは不明である。鐔金具は、半ば以上を欠失している。鞘金具としては、木室の中央部に嵌装した三個の楕円形銅環と、鞘尻金具とがある。鞘尻金具は完形を保っており、大邱飛山洞・伝金海・対馬唐崎などの発見例と

同じ型式である。把頭飾は半ば以上を欠失しているが、縦四cm、横三・四cmであり、内部が中空の銅製品である。枕形の上面には八稜をもつ凹溝があり、枕形左右の側面にはこぶ状の小突起がある。方形の張り出しが中央にわずかに残っており、AⅡ式把頭飾であることを示している。

AⅡ式把頭飾伴出例

1、平安南道江西郡台城里一〇号墓西棺^⑮(図7の5)

一九五七年に、台城里古墳群中の土壙墓から、車馬具など多数の遺物とともに、細形短剣が出土した。八号墓と一〇号墓西棺からは、発掘調査によって、細形短剣が付属品を着装したままの状態出土している。一〇号墓西棺出土の銅劍身は、漆塗りの木鞘に入っていた。鞘は、数個所で隆起した形態で、あるいは透し入り幾何学図文の金具を模倣したものかと推測される。鐔は、木製品とそれを包む金具とで構成されている。実測図によると、鐔の木製品は、木製の鈕と木製の把握部の上に嵌装していたようである。把頭飾は青銅製で、縦六・五cm、横三・七cm、高さ四cmである。

これらと一緒に、長さ三cm、幅二・二cm、厚さ〇・一二cmの銅製品が伴出している。報告者は、これを、劍のひもとりに付ける金具と推測している。このようなものは他に類例を知らないが、参考までに記しておく。

2、伝ビョンヤン出土・黄漢氏旧藏品(図7の6)

ビョンヤン付近の出土というが、遊離遺物であるから、伴出遺物などを知ることはいかならない。鞘・鉄剣身・釦・把・把頭飾の遺存する完好な例である。鞘の木室と、これに嵌装した透し入り幾何学文鞘金具がすべて遺存していて、その着装状態を知ることもできる。鞘金具には、三角形の透しと、小さな斜格子の文様を施したものと、無文の金具とがある。こうした幾何学文様をもつ鞘金具は、朝鮮北部に発見例の多い地域的特色を帯びた型式である。鞘の全長は三三・一cmで、短剣の鞘としてふさわしい長さであるが、幅が異常に大きく、鞘口で一・二・六cm、鞘尻で一・二・七五cmをはかる。鉄剣身の基部には釦状の装置があり、その上を絹紐でまき、更に漆をかけている。鐔は、断面杏仁形の木製品を鐔金具で包んでいる。把握部は木製で、表面に漆をかけ、長軸に平行して数条の溝がのこっている。この把握部は、把頭側が小さく鐔側を大きくして、中央部が膨らむ長鼓胴形とし、握るのに都合よく作っている。把頭側の先端に、方形の造り出しがないのは、木製品であるためであろうか。把頭側の先端で断面楕円形の中央部に、鉄の先端が突出している。報告者は、これを劍身から続いて把握部を貫き通した茎の末端とみている。細形鋼劍に伴う細形鉄劍の茎は短いのが通例であるが、夫租護君墓などのように茎の

長い例もあるもので、報告者に従っておきたい。把頭飾は、中央部に絹紐が遺存しているから、把頭の椽状盤部に結縛したのでであろう。方柱状突起は、十字形に平行した左右対称の位置ではなくやねじれてついている。

AIV式把頭飾伴出例

1、崇田大学所藏品(図版II-4・5、図7の8)

最近になって、その存在を知ることができるようになった遺物で、恐らく、解放後に朝鮮南部で発見したものと考える。方柱状突起をもった十字形の枕状部を鳥形像に作っている。現在、方柱状突起の半ばを欠失しているが、その全形をほぼ復原できる。四隅に切込みをつけ、内部を中空に作っている。鳥形像は背中合せで、各々、外側を向いている。頭をややつき出し、頭は細いが強く曲げており、胸はふくらんでいて、丸い胴につながっている。全体から受ける印象は、カモやガンなどの水禽が湖上にただよう様子を表現しているかのようなものである。頭には、丸く突出した目と嘴を表現し、嘴と頭頂部の間には横に三条の刻線をひいている。胴には二条の刻線をめぐらし、これに平行する数条の沈線を刻んでいる。これは、羽根または翼を表現したものであろう。なお、崇田大学博物館には、劍把の破片が展示されていて、これも出土地不詳であるが、把握部表面には鋸歯文と平行沈線文があり、そ

の先端には方形の造り出しがついている(図版Ⅱ—4)。本来の完全な形は長鼓胴形を呈し、伝金海例(図版Ⅱ—3)のように、鐔金具を同鑄していたのであろう。¹⁴⁾この劍把と把頭飾は伴出したものではないようであるが、両者とも朝鮮南部の地域的な特徴を示す例であるから、併せて紹介しておきたい。

2、日本・長崎県下県郡豊玉村佐保シゲノダン(図7の7)

一九六七年、偶然に発見し、鞘先状金具・把頭飾・鐔金具・異型細形銅劍身・鉄劍身などが伴出している。把頭飾は三例出土し、そのうち二例は十字形の上面にくまなく穀粒文を鑄出したAⅢ式で、他の一例がここで扱うAⅣ式把頭飾である。AⅣ式把頭飾は、縦一・六cm、高さ五・一cmである。方柱状突起は中空で、四隅に切込みがあり、中には小石を入れて丸とし、鈴の役割を果している。枕形の両端には二個の動物像をつけ、胴とみられる枕形の一側面に縦に三条の刻線をひき、頭には数条の刻線をつけ、頭頂部には二個の耳のような小突起がある。屈曲した長い頭や丸味のある胴、胴や頭の刻線などは、崇田大学所蔵品の鳥形像と類似する点が多い。更に金海良洞里の馬形像と比較しても、ウマというよりは鳥に近いようであるから、鳥をかたどった像と考える。頭頂部の小突起が確かに獣類の耳であれば問題であるが、コウライキジやミミズクなど、鳥類にも突起した耳のような羽がある。そ

うした鳥の耳羽を表現したのかもしれないという可能性を、考慮しておきたい。報告者たちは、この遺物を、朝鮮からの将来品とみている。これに伴った鐔金具には文様がなく、伴出した短劍は三〜五口の鉄劍身と一口の異型細形銅劍身である。対馬では、劍に把頭飾を着装した状態で出土した例がないうえに、朝鮮南部でもAⅣ式把頭飾は、未だ把に着装して出土した例がない。したがって、銅劍または鉄劍のどれか一口に着装して埋めていたとは、考えにくい点がある。ただ、この把頭飾は、鞘先状金具・異型銅劍身・鉄劍身・馬鐔など、朝鮮南部の特色を示す遺物を伴い、一方では、貨泉に示される楽浪経由の中国製遺物を伴っている。その様相は、金海良洞里で鉄劍身・鉄矛に対して方格規矩四神鏡が伴出しているのと、酷似している。

BⅠ式把頭飾伴出例

1、佐賀県唐津市柏崎¹⁵⁾(図7の13)

劍身は一部分欠失しているが、ほぼ完全に復元し得る例で、劍身と把が同鑄になっている。梅原末治氏によれば、慶応大学所蔵品と本例の拓影を重ねると全く一致するので、「同一範からでた兄弟の器」と考え得るといふ。これが事実であれば、把頭側と鐔側を別の鑄型で鑄造して接合したのではなく、把頭飾から鐔まで一つの鑄型で鑄造した可能性が強い。把が同範かとみえる程度

にまで文様や形態が類似しているのに、両者の剣身はそれぞれ異なった形態である。把が同じでありながら剣身に差異があるのは、以下の二つの異なった方法のどちらかがとられたことを示している。すなわち剣身と把を一つの鑄型に彫りこみ、一度に鑄造したとすれば、鑄造後の研磨によってのみ剣身に差異が生じる。逆に研磨によらずに剣身に差異が生じる場合は、剣身の鑄型のみが異なっていたことになる。細形銅剣身は、鑄造後の整形と刃をつけるために研磨しており、鑄型に接した面は殆んど残っていないため、未だに同範例を見出し得ないでいる。本例も鑄造後の仕上げの調整を行っているが、剣身基部の刃つけは行っていない。慶応例でも基部の刃つけを施していないから、両者は基部に関しではさほどの研ぎべりはないと考えてよい。したがって両者の剣身基部の差異は、鑄型の相違に基くのであろう。両者の剣身全体の差異は、鑄型の相違に加えて鑄造後の研磨による点も大きい。形態と用語の上では、同じ同鑄の短剣でも、製作技術の点で、向津具や三雲の例とはやや異なる同鑄の短剣ではないかと考える。

2、大英博物館所蔵品(図7の14)

この剣把には織物の圧痕がのこっており、柏崎出土の把にも織物の圧痕があったというから、この型式の剣把には紐のようなもの

のを巻きつけていたのであろう。剣身は、把と剣身を同鑄にした後に刃つけを行っており、その点で三雲例に似ている。細形銅剣身の中で、関の上部で刃つけが終り、関が少し突出した例がある。それは、本例からみて、剣身と把を組み合せた後で剣身に刃つけを行ったものであろう。関以下、茎にまで刃をつけた銅剣身とでは、刃つけの意識が異なっている。本例と柏崎発見品・慶応大学所蔵品の三例は、剣身の形態こそ異なっているが、把は非常によく似ている。

遼寧西岔溝例(図7の12)と異なるのは、把握部が中央で上下に分れることと、鐔の両端に双孔をもつ点である。把握部は、把头側の幅がやや広いため、中央で少し段をなしている。本例は、把头飾から鐔までを同鑄にした西岔溝例と、把头飾が分離した対馬タカマツノダン例などとの中間に位置する。BⅠ式把头飾は、朝鮮での明らかな出土例がなく発見数も少ないので、細形短剣の把としてはあまり盛行をみないで終わったようである。

BⅡ式把头飾伴出例

1、日本・長崎県上県郡峯村三根タカマツノダン(図7の15)

一九五四年に、箱式石棺の中から、細形銅剣身一口・鐔金具一個・仿製鏡二面とともに、把头飾が出土した。鐔は半ば以上を欠失しているが、なお、内面に黒色樹脂が付着している。鐔も把头

飾も把握部と同鑄にしておらず、分離式となっている。しかし、把握部の把握部側には、断面楕円形の造り出しがあり、長径2cm、短径1・4cmの孔をあけている。対馬サカドウ例(図7の16)ではこの装置がなく、更に便化した分離式になっている。これは、遼寧西谷溝の同鑄式から柏崎の同鑄式に変化し、更に本例のような分離式に移行した剣把の変化過程をよく表わしている。元来は、この孔に把握部の先端を接合して組み立てたものである。日本では、同鑄の向津具・三雲・柏崎例を除くと、把握部や剣身が把握部を伴出した例がなく、把握部に把握部を着装した原状のままて出土した例もない。分離式になった把握部は、日本では剣に着装されていなかったと考える。

2、慶尚北道大邱市西区飛山洞^⑦ No.2 (図9)

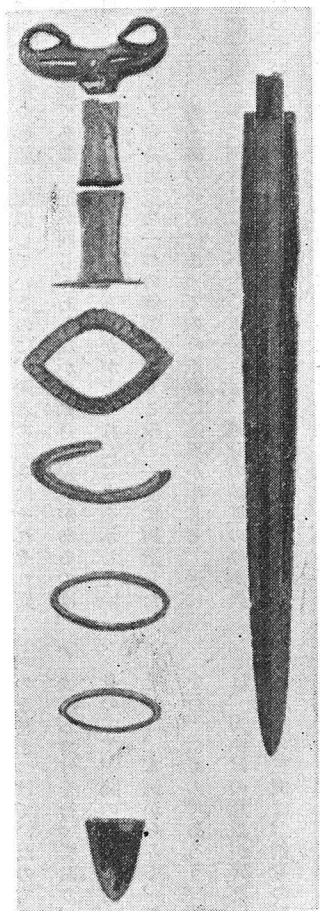


図9 大邱飛山洞発見の銅剣身・装具
(『湖嶽美術展』による)

一九五六年八月に偶然出土したが、遺構や伴出遺物について、未だ不明な点が少なくない。出土地は、飛山洞にある臥龍山の斜面で、粘板岩で作った積石の石室か箱形石棺かと推測される遺構から、多くの遺物が出土したという。この発見品の一部と思われるまとまった遺物が、李秉喆 (Yi Byeong-cheol) 氏の蒐集品中にある。剣身は細形銅剣の典型的な型式で、把握部のほかに、鞘金具・鐔金具・把握部を伴っている。把握部は、二羽の鳥が背中合せになり、互いに首をめぐらし後をふりむいて対し、その嘴を背につけている。頭頂部は丸味をもって隆起し、目の部分がやや窪み、その嘴は少し広がって、丸味がある。先端の少し広がる嘴をもつ鳥は、水棲性のガン・カモ・ハクチョウなどの類に多くみえる。鳥類の把握部をもつ剣は、南ロシアからシベリア一带にかけて広く分布している(図7の^⑧10)。それは、スキタイのアーキメデス式剣から発展・変化し、西から東へ伝播したという事は、よく知られた事実である。高度に発達した動物意匠の伝統をもつシベリアでは、把握部ばかりでなく、各

種の器具に、鳥類をかたどった例が多い^{③)}。本例は、カモカハクチヨウに類する水禽を表現している。写真をみると、水辺でカモやオンドリなどが毛づくろいをしている様子を思い出す。製作者は恐らく河川や湖沼の近くに住んでいる者で、水鳥の生態を熟知してこのような姿に造形したものであろう。把頭飾は、オールドスやスキタイの同鑄式とは異なり、劍身・把握部・把頭飾を組み立てる分離式になっている。この点に、細形短剣に伴う鳥形把頭飾の地域的な特色がある。また、把握部と把頭飾は、中間に椽状の装具を介さず、直接に結縛している^{④)}。

把握部は、鐔が同鑄になった長鼓胴形である。しかし、今では、把握部の中央と鐔金具の一部がはずれて、三個に分解している。分離した部品を組み合せる把と、把握部を鐔や把頭飾と同鑄にした把との中間的なものとしておきたい。鞆金具は、鞆尻金具を含めて五个の装具が遺存しており、主に朝鮮南部で出土する型式である。BⅡ式把頭飾の写実的な鳥形の型式にも、細形銅劍身を伴うことが本例によって確認できる。しかも、車馬具や環頭鉄刀など、中国的色彩を帯びるものが、銅矛・銅戈と伴出したという。恐らく、良洞里や対馬シゲノダン例と類似した遺物の組成であると推察し得る。

上記の各例や集成図、集成表でみると、把頭飾は、銅劍身または鉄劍身に伴い、鐔金具・把握部・鞆金具と伴出した例もある。通観すると、把頭飾には、地域差や伝世もあるが二つの系統があり、原則として、AⅠ・AⅡ・AⅢ・AⅣとBⅠ・BⅡとの順序で変化し、その逆に退化したのではない。

まず六型式の把頭飾の中で、AⅠ式・BⅠ式は、細形短剣の分布地で発見されているが、そこで自生したものではない。その発生地は、遼寧・オールドスなど、より西方の地に求め得るのである。AⅠ式把頭飾は、遼寧では主に中東部に分布するという。朝鮮では、夫租羨君墓とソウル上一洞出土の二例があり、他に数個遊離した単独の発見例がある。しかし、遼寧Ⅰ式劍に伴う秋山氏分類のⅠ式劍把頭は、未だに朝鮮では出土していない。したがって、朝鮮発見の把頭飾の中では、夫租羨君墓やソウル上一洞で出土したAⅠ式把頭飾が最も古いタイプに属し、それは、遼寧地方の劍把頭と密接な関係にある事実が明らかである。これに対して、BⅠ式把頭飾は、遼寧・オールドス・内蒙古から更にシベリアにまで類似した把頭飾が分布する。まず、遼寧省西岔溝で四口以上の類例が出土している^{⑤)}。この西岔溝よりも更に西方の河北懷来(図7の11)と内蒙古和林格爾^{⑥)}で、埋葬址から出土した例がある。

この他に、遊離遺物ではあるが、内蒙古やシベリアには多くの

剣装具を伴った把頭飾発見例

| 番号 | 発見地 | 把頭飾 | 把握部 | 鐔 | 劍身 | 鞘 | 遺構 | 備考※ | 出典 |
|----|--------------------|-------|-----|---|----|---|------|----------------|--------------------------|
| 1 | ピョンヤン市楽浪区域貞柏洞夫租殿君墓 | A I | | ○ | ○ | ○ | 土墳墓 | 鞘はA式 | 『考古民俗』1964—4, 34~39頁 |
| 2 | ソウル市城東区上一洞 | A I | | | ○ | | | | 『青銅遺物図録』13~14頁 |
| 3 | ピョンヤン市楽浪区域石岩里 | A II | ○ | | ○ | | 土墳墓 | | 『考古民俗』1965—4, 63~64頁 |
| 4 | 伝ピョンヤン | A II | ○ | | ○ | | | 鉄劍身 | 『考古学雑誌』23—3, 133~142頁 |
| 5 | 黄北 黄州郡黒橋里 | A II | | | ○ | | 土墳墓 | | 『南朝鮮に於ける漢代の遺跡』95~102頁 |
| 6 | 慶北 大邱市西区飛山洞 No. 1 | A II | ○ | ○ | ○ | ○ | 埋葬址 | 把握部と鐔は同铸 鞘はB式 | 『湖巖蒐集・韓国美術特別展』104~105頁 |
| 7 | 慶北 大邱市東区晩村洞 | A II | | | ○ | ○ | 埋葬址 | 鞘はB式 | 『震檀学報』29・30合輯号, 463~469頁 |
| 8 | 伝ピョンヤン将泉洞 | A III | ○ | ○ | ○ | | | | 『考古学雑誌』31—2, 124~126頁 |
| 9 | 平南 大同郡美林里 | A III | | ○ | ○ | | 土墳墓 | | 『朝鮮古文化綜鑑』第一卷 |
| 10 | 平南 江西郡台城里10号室西棺 | A III | | | ○ | ○ | 土墳墓 | 鞘はA式 | 『台城里古墳群発掘報告』38~51頁 |
| 11 | 伝ピョンヤン 黄澳氏旧蔵品 | A III | ○ | ○ | ○ | ○ | | 鞘はA式, 鉄劍身 | 『朝鮮古文化綜鑑』第一卷, 67~68頁 |
| 12 | 伝平川里 | A III | ○ | ○ | ○ | | | 鉄劍身 | 『考古学』7—9, 406~408頁 |
| 13 | 山口県大津郡油谷町向津具 | A III | ○ | ○ | ○ | | | 把頭飾から劍身まで同铸 | 『史林』17—1, 123~131頁 |
| 14 | 慶南 金海郡酒村面良洞里 | A IV | | | | | 埋葬址 | (鉄劍身を出土) | 『考古美術』106・107 |
| 15 | 崇田大学所蔵品 | A IV | ○ | ○ | | | | 把握部と鐔は同铸 | |
| 16 | 長崎県下県郡豊玉村佐保シゲノダン | A IV | | ○ | ○ | ○ | 埋葬址 | 鞘はB式(異型銅劍身を出土) | 『対馬』2~13頁 |
| 17 | 慶応大学所蔵品 | B I | ○ | ○ | ○ | | | 把頭飾から劍身まで同铸 | 『人類学雑誌』48—2, 114~115頁 |
| 18 | 大英博物館所蔵品 | B I | ○ | ○ | ○ | | | 同上 | 『白山学報』第8号, 4~7頁 |
| 19 | 佐賀県唐津市鏡字柏崎 | B I | ○ | ○ | ○ | | | 同上 | 『人類学雑誌』52—12, 28~29頁 |
| 20 | 慶北 大邱市西区飛山洞No. 2 | B II | ○ | ○ | ○ | ○ | 埋葬址 | 把握部と鐔を同铸 鞘はB式 | 『湖巖蒐集・韓国美術特別展』102~103頁 |
| 21 | 伝ピョンヤン | B II | | | | | | | 『考古学』7—9, 406~408頁 |
| 22 | 長崎県上県郡峰村三根タカマツノダン | B II | | ○ | ○ | | 箱形石棺 | | 『考古学雑誌』49—1, 55~59頁 |
| 23 | 長崎県上県郡峰村三根サカドウ | B II | | | ○ | | 箱形石棺 | | 『考古学雑誌』49—1, 52~55頁 |
| 24 | 伝慶州 | | ○ | ○ | ○ | | | 把握部と鐔を同铸 | 『青銅遺物図録』16頁 |
| 25 | 伝金海 | | ○ | ○ | ○ | ○ | | 同上(異型銅劍身を出土) | 『柳洪烈博士華甲紀念論叢』, 515~526頁 |
| 26 | 福岡県糸島郡前原町三雲 | | ○ | | ○ | | 甕棺墓 | 把握部と劍身を同铸 | 『日本原始美術』4, 177頁 |
| 27 | 伝平川里 | | ○ | | | | | 同上 | 『朝鮮古文化綜鑑』第一卷 |

※ 鞘のA式は朝鮮北部, B式は朝鮮南部の特色を示す。劍身は, 特に材質の表記のないものは, みな銅製である。

1973. 5. 3 現在

類例がある。このような把頭飾を持つ短剣が、内蒙古やオルドスなど長城以北の各地のステーションから、中国や朝鮮に伝えられたのであろう。朝鮮のオルドス系の把頭飾は、遼寧西岔溝などの中継地を介して、細形短剣を使用していた人々が手に入れたものと考えられる。AⅠ式の把頭飾が、遼寧式剣の把頭飾にその祖型を求め得るならば、BⅠ式把頭飾もまた、オルドス式、あるいはアキナケス式短剣に伴う把頭飾に、その淵源を求めることができ得るであろう。この河北懷来や内蒙古和林格爾の例は、BⅠ式把頭飾が戦国初期を遡らないであろうことを物語っている。

これに対して、AⅡ・AⅢ・AⅣとBⅡ式の把頭飾は、遼寧や日本の北九州でも発見されているが、分布の中心は朝鮮にある。この四型式の把頭飾は、まさしく、細形短剣の分布地で発生し、細形短剣とともに製作・使用したものであり、AⅡ・AⅢ・AⅣ・BⅡ式の把頭飾は、朝鮮で独自に発展を遂げた型式といえる。遼寧とオルドスから系統を異にする短剣が伝わりながら、細形短剣に消化されていったと同様に、把頭飾もそれぞれ本来の個性を生かしながらも、細形短剣の把頭飾として改変されていくさまを見出し得るのである。

さて、朝鮮発見の把頭飾の中には遼寧系とオルドス系の相違があり、その特色を生かしながら細形短剣の把頭飾として消化して

いった過程を、上で知ることができた。ところが、一方で細形短剣の盛行とともに、独自の把頭飾を製作し始め、次第に地域的な相違をみせるに至った。

次には、把頭飾の地域差を考えてみよう。まず、AⅡ式把頭飾では、遼寧の例が石製品であるのに対して、朝鮮では石製品とともに青銅製品を盛んに作るようになる。AⅢ式の把頭飾は、細形短剣に主として用いる型式となっており、AⅣ式は、AⅢ式とBⅡ式を折衷した独特の形態で、他の地域にはない朝鮮独自の把頭飾となっている。BⅡ式も、BⅠ式をもとにして、細形短剣の把頭飾として用いるために、内蒙古やオルドスの例とは異なっており、離式に作っている。

これらは、細形短剣を使用しない地域との比較であるが、細形短剣の分布地でも、地域差が生じている。例えば、オルドス系の把頭飾のうち、BⅡ式は朝鮮と日本で出土している。その中で、写実的な鳥形は朝鮮のピョンヤンと大邱で出土し、簡便化した鳥形は日本の北九州で出土している。また、方柱状突起のある十字形の両端に動物像をもつAⅣ式は、朝鮮南部と日本の対馬で出土しており、朝鮮北部にはまだ類例が知られていない。細形短剣の分布地域内における地域差については、把頭飾の例だけでは、少しわかりにくいので、細形短剣に伴う鐔金具・把握部・鞘金具を

挙げて補い、その差異を明らかにしておこう。

劍身や把頭飾の遺物が多いのに、鐔・把・鞘の遺存例が少ないのは、有機質の材料を用いたことが、主要な原因であるらしい。細形銅劍身の発見総数約三〇〇口の中で持を伴う例はごく少数である。鐔金具は無文と文様のある型式とに分けられる。無文の型式は、朝鮮北部と日本の対馬に類例が多く、朝鮮南部では済州島の一例があるにすぎない。一方、幾何学的な施文のある型式は、大邱飛山洞・伝慶州例など、朝鮮南部でのみ出土しており、これには鐔のような金具を伴う例がある。把頭部は、同鑄式と分離式に二大別できる。同鑄式としては、向津具や三雲の例があり、大邱飛山洞²⁰と伝慶州・伝金海の例も含められよう。伝慶州や伝金海⁴¹の例は劍身と同鑄ではないが、把頭部と鐔を同鑄している点で三雲の例に近い。また、破片ではあるが、把頭部の文様からみて、崇田大学の例もこれに類するものである。このような把頭部と鐔、あるいは劍身との同鑄は、BⅠ式把頭飾を伴う短剣にみられる。したがって、細形短剣に伴う同鑄した把の出現は、BⅠ式把頭飾を伴う短剣がオルドス・遼寧から伝播した後の時期と考える。鐔を把頭部と同鑄にした大邱飛山洞²⁰の例では、把頭飾はBⅡ式であり、それはBⅠ式把頭飾の影響下に生れたものである。これに対して、把頭部と鐔を組み立てて用いる分離式は、朝鮮北

部以外では入室里の一例を教えるのみである。

鞘は、木室を伴うのはきわめて稀であるが、幸い鞘金具を遺存した例がある。この鞘金具には、二つの型式があり、それが地域差を示している。一つは、幅の広い金具に透して幾何学図文を表わしている。他の一つは、幅の狭い楕円形無文の金具である。兩者の違いは、鞘尻金具に強く現われている。前者は、他の鞘金具とあまり違わない文様と形態の鞘尻金具を用いるのに、後者は、一見してそれとわかる形態で、鞘尻にのみ用いる金具である。透し入り幾何学図文をもつ鞘金具は、夫租羨君墓・松山里唐村・黄澳氏旧藏品・台城里八号墓・同一〇号墓西棺・ピョンヤン貞相洞など、朝鮮北部に集中している。無文の金具は、大邱晚村洞・大邱飛山洞²⁰・同²⁰・伝金海・対馬シゲノダン・対馬唐崎⁴²など、朝鮮南部と日本の北九州で出土している。

このように、把頭飾以外の剣装具でみても、朝鮮北部と南部の間に地域的な差があり、朝鮮南部と日本の方に親縁性の強い場合がある。この傾向は、時代が進むにつれて、ますます、進行している。

まとめ

細形短剣分布地の把頭飾には、オルドス系と遼寧系の違いがある。その基本的な差異は、把頭飾の形態にあらわれる。次いで、

把頭飾の着装法の差となり、前者は把握部に直接つけ、後者は陵状の装置を介して把握部と結縛する。同鑄式と分離式は、オールドス系・遼寧系どちらにも存在するが、原則として、前者は同鑄式、後者は分離式となっている。また、オールドス系の把頭飾はすべて銅製であるのに対して、遼寧系の把頭飾は、石製・銅製・土製と種々のバラエティーがある。遼寧系の把頭飾はその出土数が多く、AⅡ型式からは銅製品が出現し、その製作の中心地は朝鮮に移っている。AⅢ型式では土製品まで出土しているが、この型式で盛行したのは銅製品である。このような事実からみて、細形短剣に伴う把頭飾の主流は遼寧系であったといえることができる。

このようなオールドス系と遼寧系の把頭飾は、ある期間、併存していたといえる。遼寧省西岔溝例からみて、前漢代中葉頃には、オールドス系のBⅠ式把頭飾を朝鮮でも用いたと推測できる。その頃は、すでに、遼寧系のAⅠ・AⅡ・AⅢ式の把頭飾が存在していたようである。AⅣ式とBⅡ式の把頭飾は、こうした状況のもとに、朝鮮南部で製作したものであろう。

今回、紹介した良洞里発見の四頭の馬形像をもつ把頭飾は、AⅣ式把頭飾の範疇に属する型式である。各型式と比較すると、把頭飾AⅢ式とBⅡ式の要素を備えもっている。AⅣ式の方柱状突起は、AⅢ式把頭飾からの影響によるものであり、一方、枕形の

左右両端に動物の像をつけるのは、BⅡ式把頭飾の写実的な鳥形裝飾からの影響によるものと考えられる。AⅣ式把頭飾は、AⅢ式把頭飾を主体とし、これにBⅡ式把頭飾の要素を加え、他の把頭飾よりも時期的に遅れて製作しはじめた型式といえるであろう。この特異な把頭飾は、その発見が朝鮮南部に限られている。朝鮮南部で製作し、きわめて短期間、狭い範囲で使用しただけで、長くは流行しなかったようである。

筆者は、かつて、朝鮮初期金属器文化の地域差が、北部と南部で特に顕著であることを、指摘したことがある^⑭。

最近、銅劍・銅矛・銅戈を含む朝鮮南部の金属器が、朝鮮北部の金属器とはやや異なる発達を遂げている事実が明らかになりつつある。大邱晩村洞・大邱飛山洞・扶餘蓮花里^⑮・慶州入室里・慶州九政里^⑯・慶州坪里^⑰・全南大谷里^⑱・金海会峴里^⑲・伝金海(図版Ⅱ-2・3)などでは、銅劍身が数口まとまって出土している。しかもその型式には、種々のバラエーションがあり、同一型式のものだけが出土しているのではない。朝鮮北部では、一遺構から数口の細形銅劍が伴出したのは、大同美林里の例があるだけで、朝鮮南部とはそのあり方に違いがあったと考える。こうした現象は、銅矛・銅戈などにもみる地域的な特色であり、朝鮮南部では劍・矛・戈などの金属器を特定の集団、あるいは個人が寡占する場合

があったようである。これは、朝鮮の初期金属器文化が、ある時期から独自の地域的様相を示し得るまでに発展していたことを示すものである。他方、日本の北九州は、朝鮮北部との間に類縁関係をもちながらも、朝鮮南部との類似点が少なくない。北九州の柏崎や三雲で出土した銅剣・対馬出土の青銅器などを、朝鮮南部の青銅器と比較すれば、おのずから両者間に密接なつながりのある事実が明らかになる。大邱飛山洞・慶州入室里・同坪里・同九政里などの銅戈・銅矛は、異型化・長大化のきざしをみせ、すでに儀器化の方向に数歩を踏み出している。大邱晩村洞と伝朝鮮南部発見の中広銅戈・伝金海出土の広形銅矛・伝金海発見の異型細形銅剣身^①などは、こうした長大化・異型化の結果である。これら長大化・異型化した銅矛や銅戈は、日本の北九州地方で製作して、朝鮮南部に逆輸入したのではないかと考えられている^②。朝鮮南部では、未だ剣・矛・戈の埋納遺跡を発見していない。日本では、広鋒の矛や戈は、通常埋納遺跡で発見し、共同体の祭祀に用いたと考えられている。しかし、対馬では、箱形石棺内から広矛や異型銅剣身の出土した例があるから、朝鮮南部でも広鋒の戈や矛が埋葬址から出土した可能性がなお残されている。これからみても初期金属器のあり方・製作・保有・埋納について、朝鮮北部と南部の間には相当な懸隔があり、朝鮮南部と日本の北九州との間は、

時代が下るにつれて親縁関係が密接になっていったと考える。

このような地域差が生じたことについては、単に、把頭飾や細形短剣のみでは解明するのが難しい大きな問題であるので、今回は、細形短剣に関連した範囲内で、地域性の存在を指摘するにとどめておいた。後日、機会を得て、朝鮮初期金属器文化を総体として論じる際に、地域性やその要因についても詳述したいと考えている。

本稿のために、朴敬源・姜徳仁・尹武炳・鍾口隆康の諸先生から、実測図・拓本・写真など資料の提供を受け、特に、朴・姜両先生には便宜をはかって戴いた。記して感謝の意を表したい。

注① 特に細形短剣という名称を用いるのは、その中に銅剣身と鉄剣身を含むためである。

② 全南谷城郡木寺洞面拱北里と、大邱市山格洞燕巖山で出土している。どちらも、中央部に方柱状の突起がある型式であり、前者は石墓の付近から、後者は石器製作址で採集した遺物である。後者は、尹容鎮先生の御好意により、慶北大学校で実見したが、表面の一部に光沢のある黒色が見え、内部は灰黒色を呈するやや粗い質の土製品であった。

金載元・尹武炳『韓国支石墓研究』ソウル、一九六七。

尹容鎮『琴湖江流域の先史遺跡研究(一)』『古文化』五・六合輯、ソウル、一九六九、一〇三〇ページ、図版一、五。

③ 藤田・梅原『綜鑑』第一巻、七五ページ。

- ④ 釜山市東萊区長箭洞で、支石墓内から剣形石器と伴出した把頭飾の例がある。しかし、筆者はこの剣形石器を、磨製石器とは違った用途に用い、石剣ではないと考えている。
- 有光教一『朝鮮磨製石器の研究』京都、一九五九 三四～三六ページ、一一〇ページ、図版三三―三三。
- ⑤ 慶尚南道蔚山市東部里で、石室内から他の一口の石剣とともに出土した例がある。
- 有光『朝鮮磨製石器の研究』四六ページ、一一五ページ、図版三三―三五。
- 金海付近の出土例は、釜山の東亜大学でみたが、未発表資料であり、詳述を避けたい。
- ⑥ 榎本龜生『笠頭筒形銅器と劍柄形銅器』『考誌』二二―二、一九三二、九六～九八ページ。
- また、榎本氏は中国北部や遼寧の把および把頭飾と、朝鮮のそれらとの間には相違のあることを指摘している。把頭飾の定型化は、青銅の採用と関連し、銅製把頭飾の中心地は、ピョンヤン付近にあったと推測している。
- 榎本「結紐形劍柄頭の二変形」『考古学』一一―一、東京、一九四〇、二四～二六ページ。
- ⑦ 藤田・梅原『綜鑑』第一巻、七五～八〇ページ、図版三七、三八、四一。
- ⑧ 秋山進午「中国東北地方の初期金属器文化の様相(上)」『考誌』五三一四、二〇～二二ページ。
- ⑨ 李淳鎮「へ夫租殘君」墓について」『考古民俗』一九六四―四、ピョンヤン、三四～三九ページ。
- ⑩ 国立博物館『青銅遺物図録』一三～一四ページ、図版二〇、図面二〇。
- ⑪ 白錬行「石岩里出土の古朝鮮遺物」『考古民俗』一九六五―四、六三～六四ページ。
- ⑫ 朝鮮歴史博物館「渠浪区域貞柏洞出土の古朝鮮遺物」『考古民俗』一九六七―二、四八ページ。
- ⑬ 国立博物館「湖巖蒐集・韓国美術特別展」ソウル、一九七一、一〇四～一〇五ページ、図版一九。
- ⑭ 金載元・尹武炳「大邱晚村洞出土の銅戈・銅劍」『震檀学報』二九・三〇合輯号、ソウル、一九六六、四六三～四六九ページ。
- ⑮ 考古学及び民俗学研究所「台城里古墳群発掘報告」ピョンヤン、一九五八、三八～五一ページ。
- ⑯ 藤田・梅原『綜鑑』第一巻、六七～六八ページ、図版三七。
- ⑰ 未だ、正式な報告がないので、法量の詳細は不明である。
- ⑱ 金廷鶴編『韓国の考古学』図版七六に掲載されているが、解説はない。
- ⑲ これも正式な報告がない。掲載した写真は、樋口隆康先生の撮影による。
- ⑳ 国立博物館『青銅遺物図録』一六ページ、図版二五、図面一五。
- ㉑ 長崎県教育委員会『対馬』長崎、一九六九、二～二二ページ、図版Ⅲ―三。
- ㉒ 梅原末治「許斐氏旧葺筑前須玖発見の銅鉾・銅劍」『人類学雑誌』五二―一二(以下、『人誌』と略称)、東京、一九三七、二八～二九

く。ン。

② 注②前掲書。

梅原「支那出土の有柄銅剣」『人誌』四八二、一九三三、一一四—一一五ページ。

③ Yettis, W. P., The George Ennortopoulos collection: Catalogue of the Chinese and Korean bronzes, sculpture, jades, jewellery and miscellaneous objects, Vol. I, London, 1929, pp. 68, Pl. LXXXII

金元龍「鳥形アンテナ式細形銅剣の問題」『白山学報』第8号、ソウル、一九七〇、四—七ページ。

④ 孫守道「西岔溝古墓群被掘事件の教訓」『文物参考資料』一九五七—一、北京、五三—五六ページ。

孫守道「匈奴西岔溝文化」古墓群の発見』『文物』一九六〇—八・九、北京、二五—三五ページ。

⑤ 対馬遺跡調査会「長崎県対馬調査報告(一)」『考誌』四九—一、一九六三、五五—五九ページ。

⑥ 注⑤前掲書、五二—五五ページ。

⑦ 国立博物館『湖嶽蒐集・韓国美術特別展』一〇二—一〇三ページ、図版一五。

⑧ 金元龍「鳥形アンテナ式細形銅剣の問題」『白山学報』第八号、八—九ページ。

⑨ Loehr, M., "Ordos Daggers and Knives, New Material, Classification and Chronology," in *Artibus Asiae*, Vol. XII, Ascona, 1949.

Minns, E. H., *Scythians and Greeks*, Cambridge, 1913.

⑩ パシルク三号墳からは、両端に写実的な水鳥を表現した木製の鏡板が出土している。この水鳥は、ビョンヤンと大邱飛山洞出土の把頭飾の水鳥と非常によく似ている。

Rudenko, S. I., *Frozen Tombs of Siberia: The Pazyryk Burials of Iron-Age Horsemen*, M. W. Thompson Trans., Berkeley and Los Angeles, 1970, Pl. 97A.

⑪ 山口県向津具発見例から、把頭飾と把握部は、椽状の装飾を介して結縛したと考えている。

島田貞彦・小川五郎「長門向津具出土の飾柄銅剣」『史林』一七一—、京都、一九三三、一三三—一三二ページ。

⑫ 金廷鶴『韓国の考古学』二二八—二三〇ページ、図版八二—九二。

⑬ 秋山「中国東北地方の初期金属器文化の様相(中)」『考誌』五三—四、二〇—二二ページ。

⑭ 把頭飾の中では、A—1式が最も古く位置づけられる。しかし、これに伴う短剣身が、細形短剣の最も古い型式に属するというわけではない。細形短剣の最も古い型式には、未だ、把頭飾を伴出した例がない。

韓炳三「价川龍興里出土の青銅剣と伴出遺物」『考古学』第一輯、ソウル、一九六八、六一—七六ページ。

⑮ 中国遼寧省西豊県柴善郷姜家街一九五六年前後に発見した一大古墳群で、盗掘にあったが、多くの遺物を収拾した。遺物は二つの異なった文化系統に属し、一方は

中国系文化、他方はスキタイ系文化の要素を含んでいる。墓葬の年代にはかなりの幅があり、西漢代中葉から西漢末までで、遅くとも東漢の初期に下ることはないという。收拾された刀剣類は七一口であるが、発見総数はそれをはるかに上まわる数量であったようである。刀剣身はすべて鍛鉄製で、銅製把と木製把によって二種に分け、銅把は更に二分している。銅把の一類は、把頭の左右両端に曲環があり、把頭は二羽の鳥が頭を後にまわした形に似ている。二類は、把頭飾は遺存しないが、方柱形の把握部に七〜八個の銅環を嵌装している。桃氏劍の把握部にある二個の箍に似てはいるが、劍をふるると音を発するというから、桃氏劍のそれとは、似て非なるものである。鉄劍身は、長さ六〇〜八〇センチ前後である。銅把の一類は、把頭飾・把握部・鐔が同鑄になっている。把頭の両端は、まがって上にのび、弧を描きながら胴に接し、双環を形づくっている。胴には斜刻線をひき、鳥形の胴から頭・吻にかけて、沈線を一条めぐらしている。鐔は末広がりの台形で、一方の端が他端よりも突出して、左右、対称ではない。鐔には斜線をひくが、両端には円孔がない。B I式把頭飾を伴う例は、正確な数量が不明だが、少なくとも四口以上が発見されている。この把は、オールドス式やスキタイ式の劍把と、出土地不詳の大英博物館所蔵例や柏崎例との中間に位置するものである。

注⑨前掲書。

③ 河北省懷來縣北辛堡一号墓

一九六四年、戦国時代の銅容器や銅戈・銅刀子とともに出土した。把頭を獸面形にし、両端に双環を作っている。墓主の死体のそばに

置いていたもので、把頭には布の痕跡が遺存するという。銅劍の全長三〇・三センチ、把の長さ九・八センチである。把頭飾・把握部・鐔・劍身は、一度に鑄造した同鑄式である。

河北省文化局文物工作隊「河北懷來北辛堡戰國墓」『考古』一九六六・一五、北京、二二二〜二四二、図版參。

⑦ 内蒙古烏蘭察布盟和林格爾盟察家窪子

一九五八年に、銅戈・銅刀子・銅製裝飾品などとともに出土した。把頭飾左右の両端が上方にのびてまがり、胴部中央について、双環形をなしている。胴部は三日月の形に窪んでいて、オールドスでよくみる型式に属している。把握部には二条の凹溝があり、把頭から劍身までを同鑄にした型式に属している。伴出した銅戈の型式から、戦国中期に年代を求めることができよう。

李逸友「内蒙古和林格爾盟出土の銅器」『文物』一九五九・一六、裏表紙見返し。

内蒙古自治区文物工作隊「内蒙古出土文物選集」北京、一九六三、五ページ、図版四〇。

⑧ 尹武炳「韓國青銅短劍の型式分類」『震檀學報』二九・三〇合輯号、一九六六、四三〜五〇ページ。

⑨ 藤田・梅原「綜鑑」第一卷、五七〜五九ページ、図版三一。

⑩ 尹武炳「金海」出土の異型銅劍・銅鉞」『柳洪烈博士華甲紀念論叢』ソウル、一九七一、五一五〜五二六ページ。

⑪ 藤田亮策・梅原末治・小泉頭夫「南朝鮮に於ける漢代の遺跡」大正一一年度古跡調査報告」第二冊、ソウル、一九二五、三〇〜七三ページ、図版一九一〜三六。

- ④② 藤田・梅原『綜鑑』第一巻、六八～七〇ページ、図版三七。
- ④③ 長崎県教育委員会『対馬』、一三～二二ページ、Pl. 画。
- ④④ 岡内三真「韓国・大田地方発見の農耕図のある青銅器」『考古学ジャーナル』六九号、東京、一九七二、一〇～一四ページ。
- ④⑤ 金載元「扶餘・慶州・燕岐出土銅製遺物」『震檀学報』第二五・二六・二七合冊号、一九六四、二八七～二九二ページ。
- ④⑥ 金元龍「慶州九政里出土の金石併用期遺物について」『歴史学報』第一輯、ソウル、一九五二、三～一四ページ。
- ④⑦ 注④⑥前掲書、二九三～二九六ページ。
- ④⑧ 金貞培「全南和順の青銅遺物発見」『考古学ジャーナル』六六号、東京、一九七二、七～九ページ。
- ④⑨ 注④⑧前掲書、五二五～五二六ページ。
- ④⑩ 注④⑨前掲書、五一八～五二〇ページ。
- ④⑪ 注④⑩前掲書、五一六～五一八ページ。
- ④⑫ 注④⑪前掲書、五二一～五二六ページ。
- ④⑬ 水野清一・樋口隆康・岡崎敬「対馬」東京、一九五三、三五～四八ページ。

(京都大学大学院生・)